これから「記号づけ英文読解」を指導しようと思っている先生方のための記号づけ入門（その1）

1.述語動詞を〇で囲む

記号づけプリントを教師が作る場合も、生徒につけ方を指導する場合も、教師自身が記号づけができないといけません。まずは述語動詞を〇で囲むことを説明します。中学校で習った文法の多くは動詞の部分の勉強でした。この動詞を〇で囲むことを学ぶと、英文の基本文型がセン〇センとなることに気がつきます。第2文型も第3文型も見た目は同じです。別に動詞の左右に線（セン）は引きませんが、〇の左右に語句が来るということです。同時に〇の左にあるのが主語であることも学びます。また生徒自身が動詞を〇で囲みながら読む場合、生徒が準動詞である不定詞や分詞や動名詞なども〇をつけてしまうことに教師は気が付くことになりますし、この区別をつけてあげることで英文を正しく読む姿勢ができてきます。英語が苦手な生徒たちは、文の中で述語動詞と準動詞の区別がつかないことが多く、進学校の生徒でも述語動詞の過去形と過去分詞が同じ形の場合はしばしば間違って〇で囲んでしまいます。

記号づけ英文読解の第一歩は「動詞に〇をつける」です。以下の例を見て確認してみて下さい。

I (want) something to eat.

Nicky (is| thinking) of quitting her job.

I' (ll probably be)home late tonight.　間に副詞が入る時も多いです。

I (can| hear) a strange noise.

(Can| you hear) it?

She (has| been painting) the ceiling.

I (used to| play) tennis a lot.

I' (d better |go) now.

He (wouldn't| have been) pleased.

Two hundred people (are| employed) by the company.

The building (is| being built) now.

The boy injured in the accident (was| taken) to the hospital.

injured は過去分詞です。

Police investigating the crime (are| looking) for three men.

investigatingは現在分詞。 be動詞とセットじゃないと述語動詞にはなりません。

I (helped) her do her homework.

doは原形不定詞。 toがない不定詞のことです。

2.中学文法の整理

さらに疑問文や否定文といった中学校でさんざん習ってきた変形を統一的に説明ができてしまうという利点があります。高校1年生の最初にこの説明をしてあげることで中学校でバラバラに習ってきた文法を整理してあげられるわけです。

中学校では現在形・過去形・進行形・完了形・受動態・助動詞等の「述語の部分」の習得に相当な時間をかけていると思われます。しかしその都度それらの疑問形と否定形が加わるわけですから生徒達の頭の中では、その時その時で教わった知識がバラバラのまま集まっていて、こちらが思っているほど整理ができていないと思われます。進学校の生徒でもこれらの基本的な文法ミスが目立つからです。高校入学の初期にこれらをまとめて整理してあげることは、今後高校用の教科書を読んでいく上でもっとも重要なことの1つだと思います。なぜなら、高校レベルの英文を読んでいくためには、文の中における動詞の部分のかたまり(動詞句)を、かたまりとして認識できるかがとても重要だからです。そのためにはこれまで述べてきた「動詞を○で囲む」という単純な作業は極めて有効です。そのことによって上記のバラバラだった文法知識はたった1つの知識に集約されるからです。事実、多くの生徒の口から「中学校でなんで教えてくれなかったの？」という言葉が出るのを何度耳にしたか分かりません。以下の例を見て下さい。

1.He (likes) soccer.(現在形)

2. He (studied) English last night.(過去形)

3. This book (was|written) by Mr.Terashima in 1986.(受動態)

4. He (should|study) English harder.(助動詞)

5. She (will |marry) him next year. (未来形)

6. She (has|lived) in Tokyo for 20 years. (完了形)

動詞句を○で囲んだ場合、それを疑問文に変えると、動詞句は「カプセル」のようにパカッと割れて左半マルが主語の前に、右半マルがその場に残り以下のようになります(7-12)(ただし元々がカプセル型でない現在形と過去形の時は1'2'のようにカプセル型にまず変形する必要があります。 1'. He(does|like)soccer.　2'. He(did|study)Englsih last night.)

7. (Does | he |like) soccer?

8. (Did | he |study) English last night?

9. (Was| this book |written) by Mr. Terashima in 1988?

10. (Should | he | study) English harder?

11. (Will | she | marry) him next year?

12. (Has | she |lived) in Tokyo for 20 years?

同様にこれらを否定形にする時は、「カプセルを2つに割って、間に否定語を入れる」だけnotです。たったこれだけのことですが、驚くほど多くの生徒はこのことに気付いていません。文法指導の時、動詞句を○で囲んで「型」を意識化させることはその後の英作文や長文読解の精読の時に応用が利く非常に大切な知識になっていくと考えています。

13. He (does | not | like) soccer.

14. He (did | not | study) Englsih last night.

15. This book (was | not |written) by Mr. Terashima in 1986.

16. He (should | not |study)Englsih harder.

17. She (will| not |marry) him next year.

18. She (has|not |lived) in Tokyo for 20 years.

3.準動詞への記号づけ

述語動詞に○をつけることは分かって頂けたかと思いますが、一方紛らわしい準動詞はどうすれば良いでしょうか。不定詞や動名詞、現在分詞は普通、目的語をとっもなってカタマリをつくるはずです。括弧でくくっておくと良いと思われます。また過去分詞は多くの場合、前置詞句を伴っているはずです。準動詞は句を作る目印にもなりますので印の意味で○ではなく|右半丸) をつけておくのも良いと思います。あまり複雑になると大変ですので当面は、述語動詞に○をつけて準動詞と区別がつくことを生徒には目標にさせてください。

The boy [|injured) in the accident] (was| taken) to the hospital.

The boy [injured in the accident] (was| taken) to the hospital.

4.連結詞を□で囲む

動詞を○で囲むことが理解できましたか。次は連結詞を□で囲むことを説明します。英語の文章が長く複雑なる理由は「複文」です。述語動詞が2つ3つと一つの文に出てきます。ここでのポイントは文を「節」ごとに区切ることですが、その際の重要な視点が連結詞（接続詞・疑問詞・関係詞）の把握です。「節」の基本的な形が［□＿（＿＿）＿ ］であり複文はこの「節」の組み合わせだからです。複文は□を把握することで単文に分けることが可能になります。以下の例を見て下さい。まずは接続詞です。and やorなどの等位接続詞よりも従属接続詞が重要です。馴れるまでは節をより意識するように［　　］で括っておくのも良いと思われます。

Matt (burned) his hand [while he (was cooking) dinner].
マットは手を火傷した　　彼がディナーを作っている間に

また疑問詞も名詞節を作ることが可能です。「全ての疑問詞は名詞節を作ることができる」ということはとても重要な文法です。これは前置詞の目的語になった場合に特に読解を困難にしていますのでここでしっかり覚えて下さい。「全ての疑問詞は名詞のカタマリ、名詞節を作ることができる」です。

I (can't understand) [why he'(s being) so selfish].
私は理解できない　　なぜ彼がそんなにわがままなのか。

The police officer (asked) [where we (were going)].
警察官が尋ねた　　どこに私たちが向かっているのか

He (is worrying) [about what we (should do) next].
彼は心配している　　私が次に何をすべきか

5.関係詞節

さらに関係詞が出てきたときに効果を発揮します。まず関係詞だと思ったら□で囲みます。関係詞は形容詞節を作り先行詞を後ろから修飾しますから、文中に組み込まれているので節の把握がとても重要です。次に関係詞節（形容詞節）がどこからどこまでかを［　　］で必ず括りましょう。そして特に関係代名詞節で複雑な文の場合は関係代名詞を先行詞に戻すか普

通の代名詞にして、節の中のどこに戻るかを確認すると良いと思います。関係代名詞は元の場所を離れ節の中で先頭に移動してしまっていて、そのことが節を複雑に見せているので、もともとの場所に戻して2文に引き戻して考えることがとても有効になる場合がでてくると思います。

The woman [who (lives) next door] (is) a doctor.

隣に住んでいる女性は　　医者です

The woman is a doctor + She lives next door

What'(s) the name of the place [where you (spent) your vacation]?

場所の名前はなんですか　　あなたが休暇を過ごした(場所の)

What's the name of the place + You spent your vacation there.

以下の例ではsaid後ろ、thinkの後ろにそれぞれthatの省略があることも気が付かなくてはいけません。○が2つあるなら本来□が一つあることを予想しましょう。　また、どこまで関係代名詞節が続くかも注意しましょう。括弧の終わりの場所に注意です。

The girl [that Mary (said) she (saw) me with] (was) my sister.

メアリーが私が一緒にいるのを見たという女性は　　私の妹だった

The girl was my sister + Mary said she saw me with her.

It (is) the only news magazine [that I (think) (is) worth reading].

それは唯一の雑誌です　　私が読む価値があると思う

It is the only news mazine + I think it is worth reading.

前置詞＋関係代名詞などはカタマリごと(前置詞ごと)元の場所へ移動します。

There (are) many questions [to which there (are) no answers].

質問はたくさんある　　それらに対しての答えのない

There are many questions + there are no answers to them.

This (is) the mountain [at the foot of which he (lives)].

これは山である　　その麓に彼は住んでいる

This is the mountain + he lives at the foot of it.

6.接触節

さらに関係代名詞は接触節になっている場合にも注意です。接触節とは関係代名詞が省略されている場合です。名詞・名詞・動詞の並びは関係代名詞の省略です。□はなくても括弧でくくって「節」を見抜きましょう。

We (stayed) at the hotel [you (recommended)].

私たちはホテルに滞在している　　あなたが勧めてくれた

We stayed at the hotel + you recommended it.

This morning I (met) somebody [I (hadn't seen) for ages].

今朝私は人に出会った　　私がしばらく会っていなかった(人に)

This morning I met somebody + I hadn't seen him/her for ages.

7.前置詞句を括弧で括る

前置詞句は括弧で括ります。まとまりを作って読みやすくするためのものですから、つけなくても分かるなら細かいところまではつける必要はないかもしれません。難しい点は、同じ前置詞句であっても文の中では形容詞句となって前の名詞を修飾する場合と、副詞句となって時や場所を表す場合とがあり、文脈で判断するしかないということです。結局、**形容詞句になるか副詞句になるかは訳しながら判断することになります。**以下ではto my houseは同じ単語でできた句ですが、上がkeyを修飾する形容詞句であるのに対して、下は場所を表す副詞句になています。（下の文の最後のthis Sunday afternoonは前置詞が省略された時を表す副詞句です。thisやthatがつくと普通前置詞が省略されます。私は普通括弧で括っています。またこの文は「～かどうか」という意味の接続詞のifがありifからafternoonまでで名詞節を作っていることにも注目してください。）

I usually (put) a spare key [to my house] [in this empty can].(形容詞句)

私は普段　家のスペアキーを入れる　　この空き缶の中に

They asked me [if they (could come) [to my house] [this Sunday afternoon]].

彼らは私に尋ねた　　彼らが私の家に今度の土曜の午後に来られるかどうか　　（副詞句）

8.ネクサスについて

以上で3つの記号づけはおしまいですが、授業でもう一つつけながら、概念をマスターさせたい文法項目があります。それは第5文型やwith構文の構文解析で効果を発揮する「ネクサス（主・述関係）」と呼ばれるものです。　第5文型の動詞の右側の2つの語句の並びは普通OとCで表せられますが（SVOC）、このOCの関係でもある主語と述語の関係、つまり「Oは（が）Cの状態である」という関係に着目します。この点を意識化させるために主部に当たる語句にs'、述部に当たる語句にp'と書き込むというものです。常に「s'がp'の状態である」「s'がp'する」の関係が成りたち、理解を容易にしてくれると思います。**（下線は普通引きません。）**　使役動詞や知覚動詞の後ろの語句の並びやwith構文のwithの後ろの語句の並びに書き込ませてみて下さい。分詞が使われた構文などの理解にもきっと役立つでしょう。

I have a spare key to my house hidden outside.
　　s'　　p'

There were some children swimming in the river.
　　s'　　p'

There was a big red car parked outside the house.
　　s'　　p'

以上で「記号づけ英文読解」を行う場合の記号の付け方の基本の説明は終わりです。　あとはお手持ちの教科書で「記号づけ」をさっそく初めて下さい。　意味の取り方はフレーズ読みと同じで、英語の語順のまま読んでいきます。つまり記号を付けて構文解析をしながらの直読直解が可能なはずです。

次回のレポートでは、高校2年生用教科書のあるレッスンの中の1つのパートを使って、記号づけを実際にしながら読んでみたいと思います。